

# 芭蕉俳諧と楊貴妃

塚越 義幸

一、はじめに

『俳諧初学抄』（徳元 寛永十八年）「恋之詞」の項で、

一、楊貴妃 唐の玄宗の後なり。此事は終始「長恨歌」に侍れば、委、記するに及ばず。

とあり、この時期の俳諧において「楊貴妃」は、「恋の詞」として認識され、特に「長恨歌」からの連想が強かった事が窺い知れる。

一方『俳諧類船集』（梅盛 延宝四年）には、「蓬萊・舞・仙・瑠璃・魂・奏聞・閨・歎・櫛・白拍子」など

の付合語として、あるいは関連項目として「楊貴妃」が挙げられている。ここには、「長恨歌」だけではなく、謡曲「楊貴妃」などの題材も加えられてくる。

このような状況の中で、芭蕉は「紙衾ノ記」（元禄二年）の冒頭で、

古きまくら・古きふすまは、貴妃がかたみより伝へて恋といひ哀傷とす。錦床の夜のしとねの上には、鴛鴦をぬひ物にして、ふたつのつばさに後の世をかこつ。彼はその膚にちかく、其にほひ残りどまれらんをや、恋の一物とせん、むべなりけ

らし……

と著している。この部分は、「長恨歌」の、「鴛鴦瓦冷  
霜華重、翡翠衾寒誰與共」を踏まえていることは、一  
目瞭然である。

また彼は、「師の桜」歌仙（貞享元年）で、

馬塊三谷の楊貴妃の秋

木因

誰が国の記念ぞ鏡すむ月は

芭蕉

のように、前句で詠まれた「楊貴妃」の句（「長恨歌」  
や謡曲「皇帝」を踏まえるか）に付句を施しており、  
芭蕉ら一門の楊貴妃像の一端が窺える。さらに、「打  
ちよりて」歌仙（元禄五年）には、

老たるは御簾より外にかしこまり

芭蕉

花の名にくしどこが楊貴妃

彫棠

とあり、花の名にされた「楊貴妃」、すなわち「楊貴  
妃桜」も詠み込まれている。

本稿では、芭蕉俳諧の中で「楊貴妃」がどのように  
捉えられているかを、貞門俳諧や談林俳諧からの流れ  
も加味しつつその特徴を明らかにしてみたい。その際、  
「楊貴妃」がどのように詠み込まれたかを、白居易「長  
恨歌」（『古文真宝』前集など）や謡曲「楊貴妃」など

を典拠にしてその問題点を探ってみたい。

## 二、芭蕉以前の俳諧と「楊貴妃」

やうきひのほ、ほとくと打ちた、き

あさねをおおすほうらいのしま

（傍線は筆者による。以下同様）

これは『守武千句』（天文九年）に収められ付句で  
あるが、前句の「やうきひ（楊貴妃）」に対し、「長恨  
歌」の一句「蓬萊宮中日月長」を踏まえた付句をし  
ている。すでに江戸時代以前に、「楊貴妃」と「長恨歌」  
が付け合いの対象になっていたのである。

江戸初期の連歌学書『連集良材』（編著者未詳 寛

永八年）では、

楊貴妃

唐ノ玄宗ノ寵愛也クハシクハ長恨歌ニアリ。

とあり、連歌では「楊貴妃」のイメージとして、「長  
恨歌」が介在していたことがわかる。一方俳諧でも、『誹  
諧初学抄』「恋之詞」の項で、

一、楊貴妃 唐の玄宗の后なり。此事は終始「長  
恨歌」に侍れば、委、記するに及ばず。

とあり、連歌と同様の認識であったことが窺い知れる。そして、「楊貴妃」は「長恨歌」のテーマからも、「恋の詞」として扱われていたのである。

とすると、当時の俳諧師たちが「長恨歌」を読みながら、楊貴妃のイメージを作り上げていったと思われるが、どのような典籍によって「長恨歌」を学んでいたのだろうか。当然『白氏文集』も候補となる（『嵯峨日記』に「白氏集」の記載があり、芭蕉は見ていた可能性もある）が、当時俳諧師によく読まれていた『古文真宝』（前集）を挙げることができよう。他には、「長恨歌」と「長恨歌伝」・「琵琶行」・「野馬台詩」を一本に集めた選集『歌行詩諺解』（貞享元年）や『長恨歌図抄』（延宝五年）などがある。これは室町末期から江戸初期に流行し、詳細な頭注も示されている。（近藤春雄『長恨歌・琵琶行の研究』明治書院昭和五十六年に詳しい）『古文真宝』にも所収されていない「長恨歌伝」も合わせて読むことが可能で、大変重宝であり俳諧師が活用した可能性も高い。また、『長恨歌絵巻』（狩野山雪筆）などもビジュアル資料として参考にされてきたであろう。さらに、「長恨歌」を題材とした

謡曲「楊貴妃」・「皇帝」なども重要な要素となる。

このような「長恨歌」を取り巻く環境の中で、「楊貴妃」を題材として、どのように俳諧に詠み込まれてきたかを、まず貞門俳諧の作品から見てみたい。

① 楊貴妃の花に鶯や長恨歌

一治

『崑山集』

（令徳 慶安四年）

この句は、楊貴妃と「長恨歌」を同時に詠み込んでおり、

② 楊貴妃の花に胡蝶やうゝの曲

正章

『毛吹草』

（重頼 正保二年）

③ 楊貴妃の花のなやみも花清の池

松声

『続山井』

（湖春 寛文七年）

④ 楊貴妃は馬嵬がはらり散花哉

員明

同

これらは、「長恨歌」の一部を題材としている（②は「猶似霓裳羽衣舞」、③は「春寒腸浴華清池」、④は「馬嵬坡下泥土中」）ことがわかる。また、②の「胡蝶やうゝの曲」は、謡曲「楊貴妃」の霓裳羽衣の曲で舞った舞が、「胡蝶の舞ならん」というくだりを踏まえたものであり、「馬嵬がはらり」は、同謡曲の「馬嵬が原」

を「はらり」との懸詞として用いたものである。

⑤しらがとなりし楊貴妃の果

蓬萊の山く物や思ひ事

『俳諧塵塚』(重徳 寛文十二年)

これは、白髪になり老いさらばえた楊貴妃の成れの果て(小野小町伝説に見立てたか)を詠んだ前句に、玄宗皇帝が蓬萊山に彼女の魂を呼び戻そうとして宮中で苦惱に明け暮れたことを付けた句で、「長恨歌」の「蓬萊宮中日月長」を踏まえての連想であることは間違いない。

俳諧の付合語集『俳諧類船集』には、「楊貴妃」という項目はないが、付合語やその語の解説文に「楊貴妃(あるいは貴妃)」の語が散見する。以下その語を示してみると、

蓬萊・舞・仙・洞・鏡・笛・月・七夕・瑠璃・魂・  
奏聞・閨・歎・櫛・白拍子

となる。「楊貴妃」は「蓬萊」の付合語の一つになっていたことがわかる。「蓬萊」は、もちろん「長恨歌」にも謡曲「楊貴妃」でも用いられている。(なお、付合語のうち「洞」「鏡」「魂」「奏聞」などは謡曲「楊

貴妃」や「皇帝」に見られる語である)これらの連句作品においては、「楊貴妃」は「長恨歌」や謡曲「楊貴妃」を基本にイメージを作って、付合語を意識しつけ句がなされていると思われる。

その他の要素として、

⑥楊貴妃の花の御惱はあらし哉 重頼

『犬子集』(重頼 寛永十年)

と花との取り合わせで詠まれることも多い。(①～④も同様)「楊貴妃」と「花」の関連は、謡曲「皇帝」に「楊貴妃の花の姿誘ふ風を静めん」とあるのを面影にしているとも考えられる。また、

⑦ 楊貴妃桜

花も春のやうき日かけて桜哉

知之  
『崑山集』

⑧ 楊貴妃桜

おもんずる色はやうきひの桜哉

季成  
『続山井』

のように句題にされている「楊貴妃桜」という桜の一種として詠み込まれている例も多く見られる。特に『続山井』では、「八重桜」の項目に置かれ、⑧の他七句

用例が挙げられている。この「楊貴妃桜」とは、『和漢三才図会』巻第八十七(寺島良安 正徳二年)の「櫻」の項目で、

楊貴妃 小白の千葉。淡色を帯ぶ。香氣有り。

と説明しているように、多くの花びらを持つ八重桜の一種で香りもあったことがわかる。(一説に、奈良興福寺の僧玄宗が愛でたので、この名が付いたという) また「山の井」(季吟 正保四年)では「桜」の項目に、『増山井』(寛文七年 季吟)では「山桜」の項目に「楊貴妃」が挙げられている。『続山井』では春発句題としての「遅桜」に「楊貴妃」を挙げている。

さらに、

⑨ 楊貴妃の菊酒くむや五ろくさん

信元

(『崑山集』)

この句に出てくる「五ろくさん」はサイコロの「五六三」の目の数を表す。

⑩ 引て見る双六の賽下女が振

梅翁

しや面々の楊貴妃じゃもの

幾音

(『宗因七百韻』(延宝五年?))

ここでは「双六の賽」に対し、「楊貴妃」が付句に詠

まれている。楊貴妃とサイコロの目の関係を示す逸話が『平治物語』「叡山物語の事」に載る。その内容は、

昔は重三、重四と言っていたが、唐の玄宗皇帝と楊貴妃が双六で遊んでいるときに、皇帝が重三の目を出そうとして「朕の思い通りになれば五位にしよう」と言って賽を振ったら重三の目が出た。続いて楊貴妃は重四を出そうとして「私の思い通りになれば一緒に五位にしましょう」と言ったところ、重四の目が出た。二つの賽を五位に叙すこととして、五位のしるしとして何かと考えれば五位の袍は赤衣と決まっているので、三、四の目に朱をさされた。それ以後、重三・重四を朱三・朱四と呼ぶようになった。

というものである。同様の話は、『下学集』器具・『楊太真外伝』などに見られる。双六伝説も楊貴妃の本意の一つとなっていたのである。

以上、貞門俳諧では「楊貴妃」は恋の詞としての認知、「長恨歌」や謡曲からのイメージ、桜の一種の「楊貴妃桜」、そして双六との関わりを詠みこむものとしての本意が構築されていたことがわかる。

次に、談林俳諧の例を見よう。

① 楊貴妃は国も傾く桜哉

宗利

『ゆめみ草』（休安 明暦二年）

② 桜

位山楊貴妃桜咲にけり

露迎

『東日記』（言水 延宝九年）

③ きいたかくよ、のむつごと

返答 あるが中にもこの句あまた、び感吟しぬ

……玄宗と貴妃と七月七日長生殿にして「在<sup>レ</sup>テハ

天願<sup>クハ</sup>作<sup>ニ</sup>比翼鳥<sup>ト</sup> 在<sup>レ</sup>テハ地<sup>ニ</sup>願<sup>クハ</sup>作<sup>ニ</sup>連理枝<sup>ト</sup>」と

契られしさ、め言、たゞふたりのことなれば、さ

すがの方士幻術の仙たりし蓬萊までさがしありか

れしものさへしらざりしを、たれか聞きつたへて

いまの世までもらすらんとこそあれ。たれもよう

おぼへたむかしがたり、汝もこの珍説はさぞぎ、

つらん。かゝるおもしろき作をせめてほめこそせ

ずとも、だまってをらいで何の非言ぞ。右の出所

は「長恨歌」といひて、唐の白居易がつくりたる

ものにあるぞ。きいたかく。

『しぶ団返答』（惟中 延宝三年）

④ ちからづく連理の枝を引ばりて

貴妃をはなさぬ玄宗皇帝

『俳諧蒙求』（惟中 延宝三年）

⑤ すごろく盤のさくらの紅葉

楊貴妃も無名の酒をあたゝめて

西賀子

馬嵬がはらの恋の中宿

『俳諧大句数』（西鶴 延宝五年）

①・②では桜として詠まれており、③では「長恨歌」

の詩句を引用しつつ、玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋物語が

白居易の「長恨歌」から作られたこと述べており、④

でも「長恨歌」の「在地願作連理枝」を踏まえており、

⑤では双六伝説を付合としてゐる。

以上、談林俳諧における「楊貴妃」は、貞門俳諧の

イメージをそのまま踏襲していたことがわかる。

三、芭蕉俳諧と「楊貴妃」

次に芭蕉俳諧における「楊貴妃」の詠まれ方（三例）  
について見てみたい。

① 古きまくら、古きふすまは、貴妃がかたみより  
伝へて、恋といひ哀傷とす。錦床の夜のしとね

の上には、鴛鴦をぬひ物にして、ふたつのつばさに後の世をかこつ。彼はその膚にちかく、其

にほひ残りともまれらんをや、恋の一物とせん、むべなりけらし。いでや此紙のふすまは、恋にもあらず、無常にもあらず、蚤の管屋の蚤をいとひ、駅うまやのはにふのいぶせさを思ひて、出羽の国最上といふ所にて、ある人のつくり得させたる也。越路の浦く、山館野亭の枕のうへには、二千里外の月をやどし、蓬もぐらのしきねの下には、霜にさむしろのきりくすを聞て、昼はた、みて背中に負ひ、三百余里の險難をわたり、終に頭をしろくしてみの、国大垣の府にいたる。なをも心のわびをつぎて、貧者の情をやぶる事なかれと、我をしとふ者にうちくれぬ。

この文章は、「紙衾の記」と言われている。芭蕉が元禄二年八月二十一日、『おくのほそ道』の旅で美濃大垣に着いた折、出羽国最上で人から贈られた紙衾を、如行門下の竹戸に与えた時に作ったものである。特に前半で、楊貴妃と玄宗の故事（二人の思い出の豪華絢爛な枕や衾）を引き合いに出して、自らが所持した旅

道具紙衾（紙子でつくった粗末な夜具）との落差を導いて諧諷を狙ったのである。

古い枕や古い衾と言えば、玄宗皇帝が楊貴妃の形見として恋い慕い、彼女の死を傷んだ故事から、俳諧では恋の詞や哀傷の意として用いられた。玄宗は錦で織った布団に鴛鴦の刺繍をさせ、天に昇ったらふたりに比翼の鳥のようになろうと誓った頃をひとり偲んでいる。彼は、それらは亡き楊貴妃の肌に触れたものであり、その匂いも残っているので、ふたりの恋の思い出の品として残しておこうと思つたのである。芭蕉はそのことはもつともなことであると「長恨歌」の世界を彷彿とさせながら、自らの紙衾をそれらとは全く対照的な夜具で、恋でも哀悼のものでもない単に宿場の粗末な宿のむさ苦しさをしのぐものとして、出羽の最上の人から贈られたものと紹介した。

芭蕉は冒頭で「古きまくら、古きふすま」が「楊貴妃のかたみ」から伝えられえたと語句で、「恋といひ哀傷とす」と述べているが、そのことはすでに、

『至宝抄』（しほうしょう）（紹巴 天正十四年）の「恋の詞」には、  
一ふるき枕まくら いにしへの妻つま

と、『はなひ草』(立圃 寛永十三年)には、

一古き衾・古枕 恋也 哀傷也。

とあり、これらが「恋の詞」であり、「哀傷」であることが共通に理解されていたことが窺える。さらに「俳諧御纂」(貞徳 万治二年)「ふるき衾・古き枕」の項には、

共に恋也。哀傷の意の心あれども恋のかたに引る也。しかれば哀傷など打越には用捨あるべき歟。

右無言抄の説也。是を恋と定る事、長恨歌の語ゆへなるべし…

とあり、『俳諧無言抄』(梅翁 寛文十二年)の説をも引用し、「ふるき衾・古き枕」が「恋」であり「哀傷の意」としても用いられていたことを明確にし、「恋の詞」と定めた理由として「長恨歌」に著された詩情が介在していたことも示している。

また、『宝蔵』(元隣 寛文十一年)卷之三「衾」には、

こ、のとせがほど壁にむかはせ給てかぶらせ給ふは、そもさんか、仏くさきか、あかくさきか。彼  
太平の天子の旧衾旧枕としたはせ給ふは、さぞ

楊貴妃の袖の香やのこるらんと、今も御いたはしくこそ。なぞらへて思ひよするもそらおそろしく、またかたはらいたき事なれど、たれとともめんくの楊貴妃なき身にしもあらざれば、はたとせ計過ぎにしゆめのたぐち、ふと思ひ出れど、たださむしろのころびねにこそ。

とあり、すでに「旧衾旧枕」が、玄宗皇帝の寵愛した楊貴妃の残り香を象徴するものとして意識されていたことも明らかである。

また『俳諧類船集』の「ふるき衾」の項には

独寝 別かれし跡 夢 物おもふ夜 破れ障子  
涙かなしき月 侘人の聞 乞食 さび鐘かまゆる  
貧僧の座禅 あの時へもとをく此世に長き煩の  
身こそ下便なる次第なれ 荒れはて、むなしき床  
のかたみにはふるき衾のむつまじき哉 翡翠衾寒  
誰与共云々楊貴妃のなき跡を歎給ふ心也

とあり、「ふるき衾」の付合語として「独寝」・「別れし跡」・「物おもふ夜」などが挙げられおり、その例として「翡翠衾寒誰与共云々楊貴妃のなき跡を歎給ふ心也」と「長恨歌」の一句「翡翠衾寒誰與共」を用い楊



貴妃の亡き跡を慨嘆する玄宗皇帝の様子を挙げてい  
る。

このように「ふるき衾・ふるき枕」が、貞門時代では玄宗皇帝が楊貴妃を失った哀傷の意を象徴するもので、「長恨歌」の「翡翠衾寒誰與共」からの連想であることが固定化された概念であったことがわかる。芭蕉もこのような貞門俳諧時代からの「楊貴妃」や「古きすま・古きまくら」のイメージを享受しながら、「紙衾ノ記」で竹戸に与えた衾との対照物として用いたのである。

ただ「長恨歌」の「翡翠衾寒誰与共」の一句には古  
いという意味は表されていない。『芭蕉俳文集上』（岩  
波文庫）の「紙衾ノ記」の注の中で堀切実氏は、

支考編『和漢文藻』註には、「長恨歌ニ翡翠ノ衾  
寒クシテ誰ト共ニカセン云々、唐詩解ニ旧キ衾故  
キ枕ニ作レリ」とあるように、白楽天の「長恨歌」  
の中の「翡翠ノ衾寒クシテ誰ト共ニカセン」一節  
が、平安時代読まれていた『白氏文集』の別本に  
は「旧キ枕故キ衾誰ト共ニカセン」とあったらし  
く『源氏物語』「葵」巻をはじめ、『新撰朗詠集』

などにも、そのかたちで引かれてきた。概して室  
町以前は「旧枕古衾」、それ以降は「翡翠衾寒」  
のかたが多いとされる。

と解説されており、「古きまくら、古きすふま」の典  
拠として、『和漢文藻』注の『唐詩解』（明 唐汝詢）  
の用例や室町以前の『白氏文集』には「翡翠衾寒誰與  
共」が「旧枕古衾誰與共」になっている別本があるこ  
と（金沢文庫本『白氏文集』などでは「旧枕古衾」と  
なっている）を指摘している。また、それらの用例が、  
『源氏物語』「葵」の巻や、『新撰朗詠集』巻下「恋」  
にあることをも示された。（他に『唐物語』「楊貴妃」  
や『宴曲』「究百集」「長恨歌」にも用例がある）

井本農一氏が、

『和漢文藻』所収の「紙衾ノ記」の支考注には、「長  
恨歌ニ翡翠ノ衾寒クシテ誰ト共ニカセン云々唐詩解ニ旧  
衾故キ枕ニ作レリ」とあり、以後の諸注はこれに  
従うが、当時の「長恨歌」の通行本では「旧衾故  
枕」の表現は見当たらず、芭蕉がわざわざ明末の  
唐汝詢の『唐詩解』を読んでいたとは思えない。  
古き衾・古き枕が恋であり哀傷の対象となってい

たのは、すでに『至宝抄』や『産衣』などの連歌書や『御傘』や『増補はなひ草』などの俳書にあり、芭蕉はこれらを参照したと考えるのが妥当だと思われる。

と述べられているように、俳書の記述ひいては連歌俳諧の本意（すでに前出）というものを順守したと考えるのが妥当であろう。また、新聞一美氏が

季吟の湖月抄は「ふるき枕・ふるき衾」の出典として細流抄や弄花抄を挙げ、それらに引用する「長恨歌」の本文の異同（「旧枕故衾」と「翡翠衾寒」）を紹介している。井本説では、最初この湖月抄を「紙衾の記」の出典と推測されたが、後に連歌書や貞徳の『御傘』などの俳書から直接取って書いたとされる。しかし、身近な白氏文集や源氏物語の注に旧枕本文とともに翡翠本文があったとすれば、むしろ芭蕉は源氏物語本文などに引かれている旧枕本文とともに翡翠本文があったとすれば、むしろ芭蕉は源氏物語本文などに引かれている旧枕本文を選びとって用いたと考えたほうがよいのではないか。

と述べられているように、井本説をさらに進め、『源氏物語湖月抄』（葵の巻）に引かれる注から「旧枕故衾」本文を選択した可能性を指摘されたが、芭蕉と季吟「湖月抄」との関係からも十分有りうることだろう。

さらに、藤野岩友氏は、

『源氏物語』葵の巻に「ふるき枕ふるきふすま誰とともにか云々」とあるが、この句は、白楽天の長恨歌に基づくといわれている。湖月抄のふるき枕ふるきふすまの条に、細流抄・弄花抄の「鴛鴦瓦冷霜ノ花重シ旧キ枕故キ衾誰与共ニカセン 唐本二ハ多分翡翠ノ衾寒シテ誰与共ニカセン」を引き、「旧枕古衾とあるのは和本の義にやおぼつかなし 又云古文真宝二所ハ載セル翡翠ノ衾寒シテ誰与共ニカセン云々」と示しているが、両抄の筆者は実際「旧枕故衾」に作った本は見えておらず、おぼつかないと言っている。或いはここにも引いているように古文真宝（前集）あたりで間に合わせていたのではあるまいか。

とあるように、『源氏物語』の注釈において、『古文真宝』の存在は大きく、また後の「長恨歌」の本文に大

大きく影響していたことが言及されている。同氏は、使  
用した『湖月抄』本文の注の中で

三矢文庫本 美濃判写本 八冊 先生自筆の「古  
文真宝諺解二唐詩解二八旧枕故衾二作レリトア  
リ」の付箋あり。

とあり、三矢重松氏の付箋に『古文真宝諺解』の注の  
ことが書かれたことが記されている。この『古文真宝  
諺解』とは『古文真宝前集諺解大成』（天和三年 榊  
原篁洲）のことで、その「長恨歌」の「翡翠衾」の注  
に、

翡翠の羽を以て飾たる衾なるべし、唐詩解<sup>二</sup>作<sup>二</sup>  
舊枕故衾<sup>一</sup>、言は鴛鴦瓦上に霜華を重く置て、嚴  
冷酷しき冬の時も夜に待る人なし、翡翠の衾寒し  
て誰と與にか擁せんやと也。

とある。少なくとも『和漢文藻』注で引用されている  
のは、おそらくこの注によるものと思われる。

芭蕉はもちろん貞門時代からの俳書の「楊貴妃」・「ふ  
るき枕・ふるき衾」の本意である「恋・哀傷・長恨歌」  
を基本としながらも、新聞氏の説かれるように『湖月  
抄』の注などからの知識も踏まえていったと考ええらえ

る。さらにそこに引かれる『唐詩解』から直接ではな  
く、この『古文真宝前集諺解大成』の注に引かれる「旧  
枕故衾」あたりを拠り所として、「長恨歌」の「旧枕  
故衾」のイメージを構築していったのではなかないと思  
われる。

## ② 馬塊三谷の楊貴妃の秋

誰が国の記念ぞ鏡すむ月は

芭蕉

（「師の桜」歌仙 貞享元年）

木因は、楊貴妃が最期を迎えた馬塊坡下を三谷（吉原  
付近の刑場）に見立て、やつしの手法を用いることに  
より、秋の感傷を一層強めている。それに対し、芭蕉  
は「長恨歌」のだ一句目の「漢皇」に基づき、あえて  
国を疑問としながらも、前句の楊貴妃の国つまり唐の  
鏡のごとく澄んだ月を想起させた。（鏡の付合語とし  
て『俳諧類船集』には「貴妃のなやみ」があり、楊貴  
妃の複雑な気持ちも詠み込んでいる）しかし、ここ  
では、「長恨歌」の詩句を直接引用しているわけではない。

③老たるは御簾より外にかしこまり

芭蕉

花の名にくしどこが楊貴妃

彫棠

(「打ちよりにて」歌仙 元禄五年)

芭蕉の前句は、御簾の外でかしこまる老人を詠んでいるが、彫棠(其角門)の付句は前句の「老たる」を老女と取り、楊貴妃の寵愛ぶりを嫉妬するさま(「花の名にくしどこが」にそれが込められている)に詠み進めている。もちろん八重桜の楊貴妃桜を詠んではいることは言うまでもない。ただここでも「長恨歌」の詩句の直接の引用はなく、「楊貴妃」の名前が登場することにより、前句の御簾の場が唐王朝の宮中であることが明確になったのである。

#### 四、おわりに

以上、「楊貴妃」が芭蕉俳諧の中でどのように詠まれているかを、貞門俳諧から談林俳諧を振り返りながら考察してきた。三例しか挙げられないので、明確な志向をさぐることは難しいとは思われるが、一応まとめてみたい。

貞門・談林では、「楊貴妃」はほぼ共通した本意を

作り上げていた。それは、『俳諧初学抄』などの俳諧作法書に示されていたように、「恋の詞」であり、「哀傷の意」を伝えるものであり、「長恨歌」のイメージであった。また、『俳諧類船集』などの付合語集などでも、直接「楊貴妃」という語で立項はされていないが、「蓬萊・舞・仙・瑠璃・魂・奏聞・閨・歎・櫛・白拍子」などの連想語として捉えられていた。そんな本意の中で、実作品においては、「長恨歌」(謡曲「長恨歌」・「皇帝」なども含む)からの引用、「楊貴妃桜」という桜の一種としての花、さらに双六伝説のヒロインとして詠まれるなど、いくつかの傾向が見られた。

そのような状況の中、芭蕉もそれまでの本意を踏まえながら、連句では付合語(鏡と楊貴妃のなやみなど)を活かし、「楊貴妃桜」も詠みこんできた。さらに「紙衾ノ記」といふ俳文の冒頭で「古きまくら・古きふすまは貴妃がかたみより伝へて、恋といひ哀傷とす」と述べ、『源氏物語』にも見られる文を踏まえ、「長恨歌」の旧本や『古文真宝前集諺解大成』に引かれる『唐詩解』の本文「旧衾故枕」と「楊貴妃」を取り上げ、実際使い古したみすばらしい紙の衾との対比に用いた。

この文章では「楊貴妃」の雅の世界を俗の世界と対照させて、諧謔をねらう手法がとられている。また、本意としての「恋」「哀傷」などの概念を示しつつも、実際にはまったく別の世界である「旅の愁い」や「友情」などがテーマとなっている。まさに二元対立の滑稽さを狙っていたと考えられる。

「楊貴妃」と俗を対比した作品としては、俳諧七部集の一つである『あら野』（荷兮 元禄三年）に、

楊貴妃

雲髻半偏新睡覺 花冠不聖下堂來

はる風に帯ゆるみたる寐兒哉

越人

という句とそれに付された漢詩題がある。この句は、尾張蕉門越人の句であるが、句題として「楊貴妃」と「長恨歌」の第九十五・九十六句を示している。（ちなみに、「雲髻半偏新睡覺」は文字の異同があり、この形のもは、江戸時代に行っていた『白氏文集』の明の馬元調本であるので、当時『白氏文集』は馬本を讀んでい可能性がある）楊貴妃は睡りから覚めたばかりで、豊かな髪のは寝癖がついており、冠も整えな

いまま堂からおりてくる。それでも彼女は妖艶である

という詩句を踏まえて、春風を受け（冠ではなく）帯がゆるんだままの寝顔がなんとも気楽そうだなあという句を詠んだ。寝起きでも麗しい楊貴妃の姿とは対照的に、着物がはだけ帯がほどけてしまっている庶民的な女性を詠み、雅俗を並立させることによるやつしの手法に諧謔を求めている。

また、芭蕉の高弟其角には

楊貴妃の夜はいきたる松魚哉

其角

『類柑子』（其角 宝永四年）

がある。この句は楊貴妃を鯉に見立てた句である。楊貴妃の温泉から出てきて寝化粧をした姿は、まるで句のとれたての鰹のごとくムチムチとして脂がのついているとの意。それまでの「楊貴妃」のイメージとは一風変わった其角らしい作ではないか。

芭蕉さらに蕉門において、「楊貴妃」という題材においても、単に句中に「長恨歌」を引用したりするのではなく、新風（蕉風）を模索しようとする姿勢の一端が窺えるのではないだろうか。

## 注

- (1) 『古典俳文学大系』集英社による。以下注記のない作品は同様。
- (2) 『近世文藝叢刊1 俳諧類船集』(昭和四十四年)による。以下同様。
- (3) 『新編日本古典文学全集71松尾芭蕉集②』(小学館一九九七年)、本文は『和漢文藻』による。
- (4) 寛文五年刊『魁本大字諸儒箋解古文真宝前集』による。以下同様。
- (5) 『校本芭蕉全集 第三卷』(富士見書房 平成元年)による。芭蕉連句は以下同様。
- (6) 『続々群書類従』第十五(国書刊行会 昭和四十四年)による。
- (7) 『倭漢三才圖會』(日本随筆大成刊行会 昭和十年)
- (8) 『平治物語』中世の文学(三弥井書店 平成二十二年)による。
- (9) 井本農一『芭蕉の文学研究』(角川書店 昭和五十三年)所収「芭蕉の紀行と出典」による。
- (10) 新聞一美「わが国における「長恨歌」受容について」(白居易研究年報第十一号 二〇一〇年所収)による。
- (11) 拙稿「芭蕉俳諧と『源氏物語』」(『野州叢書2 源氏物語の魅力』おうふう 二〇一〇年所収)で、芭蕉俳諧において『湖月抄』刊行以後は、それまでと違って本文の引用が目立つようになる点を指摘した。
- (12) 藤野岩友『中国の礼俗と文学』(角川書店 昭和五十一年)所収「源氏物語の旧枕故衾の句」による。